

アイデンティティの表現方法としての写真投影法

Photo Projective Method as a tool for expressing one's identity

キーワード：写真投影法、アイデンティティ、撮影テーマ、個人内比較

大石 千歳

問題意識

写真投影法とは、野田(1988)⁸の「写真による環境世界の投影的分析法」のことである。野田(1988)⁸の『漂白される子供たち』では、多くの子どもたちに3～4本のレンズ付きフィルムを渡し、「一日の生活、および好きなもの」というテーマで写真を撮影してもらった結果が報告されている。野田は昔と1980年代の子どもの撮影内容を比較検討し、時代が新しくなるにつれて人間の姿が写っていない写真が増えたこと、テレビ画面等を映した写真が増えたことなどを発見し、現代社会に生きる子どもの内的世界を捉える方法としての写真投影法の有効性を主張している。野田は精神医学の立場から、ロールシャッハ・テストやバウムテスト等のいわゆる投影法による人格検査が、対象者個人を単体で切り離してアプローチするという立場から作成されているのに対して、写真投影法は取り巻く環境と不可分なものとして人間を捉え、人間が環境をどのように認知しているかを視覚的に捉えられる手法であると主張している。野田(1988)⁸が命名した写真投影法は、様々な研究分野や撮影テーマに活用することができる。何らかのテーマに基づいて、自由に写真を撮るという方法をとる調査方法は、みな写真投影法と呼ぶことができる。

心理学においては、心の内面に対して客観的な測定や記述を行うことが求められ、その際の手段としては、言語的手段に頼らざるを得ない部分が多い。しかし、心の内面はうまく言語化しがたい部分もあり、言語化することによってある程度の情報の欠損が起きるのを避けられない。このような問題点を克服するた

めに、臨床心理学分野では、各種の描画法（人物画、樹木画、家族画など）や箱庭療法など様々な技法が用いられている。

描画法は、クライアント本人が樹木にせよ人物にせよ何らかの絵を描くことになる。精神科医療での描画法による診断や治療においては、絵の稚拙自体はさほど問題にならないかもしれない。しかしもう少し広く一般的に、絵による自己表現を試みる場合は、誰もが必ずしも頭の中のイメージを望み通りに描けるわけでないという問題は、大きな障壁となりうる。これに対して写真の場合は、現在のカメラの技術の進歩により、誰もがシャッターを押せばある程度美しい写真を撮影することができる。写真というメディアには、絵の上手下手にかかわらず、言語的表現では表しきれない心の内面を視覚的に描写し、見る者に客観的に提示する手段として、大きな可能性が秘められているのである。加えて、絵を描くにはある程度の時間や手間がかかるのに対して、写真は一瞬にして映像を切り取り、記録することができる。デジタルカメラを用いれば現像の手間もいらない。この利便性も写真の大きな利点である。

上記より、写真投影法の利点は以下の3点である。

1. 個人を環境と独立の存在として捉えるのではなく、環境と一体の存在として個人を表現できる。
2. 言語的表現を用いた測定方法では測れない個人の内的世界を視覚的に表すことができる。
3. 絵画的表現の巧拙やかかる手間による不利益がない表現方法である。

次に、各学問領域における写真投影法の活用方

法の概要を紹介する。第一の立場は、野田(1988)⁸の立場を引き継いだといえる、自己心理学における自己概念の測定方法としての活用法である。心理学全体からみた位置づけとしては、どちらかといえば定量的な立場、すなわち個人差よりも統計的な一般化を重視している研究である。

向山(2005)⁴では、Ziller(1990)¹⁶の自叙写真(auto-photography)について、実施方法をより詳細にした形で、撮影された写真から撮影者の性格特性を推測する研究を行った。撮影時のテーマは「自分は誰かを写真で自由に表現する」と教示された。2名の女子大学生が撮影した写真の内容をみて、109名の女子大学生が、擬態語(臆病さ、緩やかさ、几帳面さ、不機嫌さ、淡白さ、軽薄さに関する30語)、およびBigFive性格特性(神経症傾向、外向性、開放性、調和性、誠実性)を表す30語によって撮影者の性格を推測した。その結果、几帳面さや誠実性という側面が特に、写真から高い確信をもって推測される内面であることがわかった。この研究の特徴は、写真を撮影した本人の感想というよりも、写真を見た他者がその特徴から撮影者の人物像をどれほど明確にイメージできるかという他者評定の観点から、写真が撮影者の特徴をどの程度正確に表現できるかを検討した点と、109名の評定者を確保したことにより、統計的な検討を行っている点である。

第二の立場としては、定量的研究の観点をさらに推し進めた、社会心理学分野での活用がある。岡本・藤原(2009)¹²は、学生にとって大学への所属意識(社会的アイデンティティ)を規定するものは何かを検討するために、関西の4つの大学の学生に、大学キャンパスの中を自由に撮影してもらった。撮影時のテーマは「〇〇大学での一週間をこのカメラ(27枚撮りレンズ付きフィルム)で撮影してください」というものであった。撮影された写真ごとに、「何を撮影したのか」「その時にどのような感情を持ったのか」を尋ねた。

その結果、いずれの大学でも友達、教室、授業、校舎、部室、所属学部、図書館などを撮影した写真が多かったが、紅葉、駐車場、中央芝生など、個別の大学の特徴を表したものもみられた。写真の

撮影内容は、社会的アイデンティティに関する測定尺度(集団所属意識、メンバー親近感、集団的威信、集団への行動意図を測定する質問項目から構成される)による測定結果とも一致した方向性を見せており、写真投影法が大学への所属意識という社会的アイデンティティを視覚的に捉える方法として、有効であることが示された。ただしこの立場に基づく研究については、統計的分析を重んじ結果の客観性を確保することを重視したため、各々の写真にコメントをつけるとはいえ、基本的には撮影内容ごとに写真の枚数を数えること以上には、撮影者個々人の内面を深く掘り下げるのが難しいという点を指摘しうる。

第三の立場としては、臨床心理学的な活用法、あるいは直接的な臨床活動ではなくとも、統計的ではなく個々人にアプローチする定性的研究の観点から、ライフストーリーの理解を通じた自己理解・自己発見に資する活用法が挙げられる。すなわち、心理学における質的研究の立場からの活用である。もう少し具体的にいえば、撮影した、あるいは過去に撮影された写真を、自分のことを語ったり表現したりする道具として用いるのである。野村(2004)⁹は、高等学校の写真部顧問である著者が、部員である高校生が撮影した写真の変化から、撮影者の人格が明るく開かれたものに成長してゆく様子を追った記録である。中年男性の禿げた頭を撮影することによって、幼い頃離婚して別居している父親に会いたいという思いを表現した写真や、自分の面倒を見てくれた祖母の姿をコラージュした写真など、撮影内容が撮影者の内面を实によく象徴していることがわかる。

志村・鈴木・伊波・下垣・下山・萩原(2004)¹³や鈴木(2009)¹⁴では、高齢者介護における「回想法」として、昔を思い出させる懐かしい写真を用いて、ライフストーリー語ってもらう方法を紹介している。老人ホームに入居している高齢者に、自分が若かった時代の写真を見ながら思い出話をしてもらうことにより、高齢者の記憶を引き出し、介護者との関係をより深めることができるという。

また、学術的研究ではないが実践的な試みとして、写真家であり社会人対象のコーチング(自己啓発)講師のなかにし(2004)⁷による「フォトセラピー」

などがある。なかには、写真の撮影とそれを使った自己啓発を組み合わせたフォトセラピーを開発した。Search (見つける)、Shoot (切り取る (撮影する))、Select (選ぶ)、make Sense (意味づける) の4ステップによって、「本当の自分」を見つけよう、という趣旨のワークとなっている。なかには、自分の生き方を見つけれずに迷っている若い人などを対象として、このセラピーの普及活動を進めている。写真を用いるメリットとしては、絵画や芸術表現よりも手軽に行えること、絵が上手でなくても自己表現が可能であることを挙げている。フォトセラピーでは、被写体に何を選ぶか、撮影のしかたの癖、写真を撮る際の人や物事との向き合い方にその人の個性が表れる。また、撮影したときにどんな気持ちであったか、今どんな気持ちで写真を選んでいくかを、よく自分に問いかけることによって、これまで自覚していなかった自分の姿に気づくという。加えて、選んだ写真に言葉によるメッセージを付け、公開したり他者に見せたりすることにより、さらに自己像を明確にしてゆくというのである。

第四の立場として、心理学からは離れるが、都市計画・ランドスケープデザイン研究における活用が挙げられる。この領域における事例は数多いが、中村・小林・高橋・萩原 (2001)⁶や長瀬・浅野 (2004)⁵などを挙げることができる。中村・小林・高橋・萩原 (2001)⁶では、都市域河川の水辺デザインに関する研究に写真投影法を用いている。この研究では、神奈川県鶴見川水系のうち河川整備形態の異なる矢上川、梅田川、恩田川を対象として、水辺デザインに関する専門家8名が写真の撮影を行った。1河川につき24枚の写真を撮影し、その中から「好きな写真」と「嫌いな写真」を5枚ずつ選び、選んだ理由を記述した。その結果、河川の専門家がどのような観点で河川を観察し、河川の印象の善し悪しを判断しているのかが明らかにされた。

本研究の目的

本研究の目的は、自己概念に関する心理学的研究および自己表現の手段としての写真投影法の実践を行うことである。この際、統計的・定量的な観点と

いうよりも、撮影者個人のライフストーリーを写真から捉えるという、定性的アプローチをとる。すなわち序論における第三の立場による研究である。

本研究では、個人の内的世界とりわけ自己のアイデンティティを視覚的に表現する方法としての写真投影法の可能性を追求する。新しく撮影する写真と、過去に撮影された写真の両方を活用する方法 (「持ち寄り写真投影法」と命名する) によって、個人のアイデンティティの構成要素と、それが構成されるまでの過去、およびそこから続く現在と未来に亘るライフストーリーを、短時間で詳細かつ客観的・具体的・視覚的に検討する。この際に特に問題としたい点は、写真を撮影する、あるいは過去の写真から選ぶ際に、どんなテーマを設定するかという問題である。野田 (1988)⁸では、「一日の生活、および好きなもの」というテーマが設定された。岡本・林・藤原 (2009)¹²では、「〇〇大学での一週間」というテーマで写真の撮影が行われた。テーマ設定によって、写真の内容はどう異なってくるのであろうか。

研究1では、写真投影法に関する実証研究の端緒として、「私の大切なもの」という撮影テーマによる撮影、およびインタビューを行った。「私の大切なもの」というテーマは、Erikson (1959)¹の自我同一性 (アイデンティティ) の構成要素の中核をなす、「自分が強く傾倒するもの」という部分を抽出するのに適しているという理由で設定したものである。

Marcia (1966)³は、アイデンティティ概念に関して詳細な検討や測定を可能にするために、同一性地位 (Identity Status) という概念を導入した。青年がアイデンティティを確立したか否かを判断する基準として、危機を体験しているか、自己投入 (commitment: 自分が傾倒し打ち込めるものを持っているか) という2点を重視した。本研究のとりわけ研究1では、この自己投入という要素を重視し、自己のエネルギーの多くを費やして打ち込める対象を持っている若者のアイデンティティのあり方について、写真投影法を用いて記述することを目的とした。この観点に加えて、Erikson (1959)¹の自我同一性概念における内容的分類としての4要素 (詳しくは谷 (2001)¹⁵を参照のこと) を考慮した。この4要素とは、対自的同一性 (自分自身に

関する明確さ)、対他的同一性(本当の自分と他者からみられている自分が一致するという感覚)、自己斉一性・連続性(過去・現在・未来にわたって自己のあり方が連続・一貫しているという感覚)、心理社会的同一性(社会の中に位置づけられた自分という感覚)である。写真を撮影することによって、他者からみられる自分、他者との関係性の中での自分、自分が大切にしている自分を、視覚的に捉えることができる。加えて、新しく写真を撮影するだけでなく、過去に撮影された写真を持ち込むことを認めることで、過去から現在にかけての自己の連続性を捉えることが可能になる。研究1は、このような諸側面からのアイデンティティ把握の試みとして行われた。

研究2では、一人の撮影者が「私の大切なもの」「あなたはどんな人ですか」「あなたの今の気持ち」3つのテーマにより撮影した写真の内容を比較した。上述のように、アイデンティティには様々な部分がある。撮影テーマの設定によって、アイデンティティ概念のどの部分が撮影の中心となるかが異なってくると予測される。「私の大切なもの」というテーマであれば、「対自的同一性」や「自己の斉一性・連続性」の部分が撮影や語りの中心となってくると考えられる。これに対して「あなたはどんな人ですか」というテーマでは、「対他的同一性」や「心理社会的同一性」が中心となるであろう。「あなたの今の気持ち」に関しては、写真を通して感情表現をするという要素を重視している。その時々感情表現というのは、写真ではなく文章で自己のあり方を記述する20答法(Twenty Statement Test:Kuhn& McPartland, 1954)²と写真投影法の関連性を検討するために必要な観点である。20答法に関しては、大石(2003)¹⁰がその短縮版としての10答法を用いて、アイデンティティの測定を試みている。この研究では、大石(2003)¹⁰では、看護学生のアイデンティティの定義次元の記述と分類を試みている。「中学時代の友人に、今の自分について紹介する」という設定で、「私は～」で始まる文章を最大10個記述してもらうという方法(10答法)をとった。その結果、看護学生である、また女子校に入ってしまったなど、現在の社会的な立場という他者からみた際の客観的な自分の姿に関する記述が最も多かった。その他の

記述内容の分量は、趣味、余暇、容姿、友人、性格、所持品、現在の状態といった順であった。このうち「社会的な立場」が「対他的同一性」および「心理社会的同一性」、「趣味・余暇・容姿・性格・所持品」などは「対自的同一性」を表現するものであり、「現在の状態」という部分が、テーマ3に当てはまるものと考えられる。

研究1

目的

「持ち寄り写真投影法」によって、個人のアイデンティティの構成要素と、それが構成されるまでの過去、およびそこから続く現在と未来に亘るライフストーリーを、短時間で詳細かつ客観的・具体的・視覚的に検討する。

方法

大学生女子Aさんに、使い捨てカメラ(27枚撮り)で撮れる枚数という条件で「私の大切なもの」を撮影してもらい、現像した写真と「手持ちの写真で大切なもの」を持参してもらった。インタビューは約60分のセッションを2回行った。1回目は撮影した写真と手持ちの写真を合わせて、自分にとって重要な順に並べてもらい、一番重要なものから順に説明をしてもらった。2回目は、写真の話の続きと未来に関する時間的展望を中心とした補足質問を行った。

結果

撮影された写真の内容(本人が挙げた「大切な」順)
Aさん:スポーツ選手で、大学トップレベルの成績。

- ① お父さんとお母さんの2ショット。
- ② 練習中の自分——場所は大学のトレーニング用施設。試合のときに必ず飲むドリンクを持っている。大学入学以来ずっと勝ち続けていて、試合日に飲んでいるドリンク。
- ③ 自分の部屋(アパート)——最も落ち着く場所。
- ④ 運動部活動の同じ種目の学生全員集合写真
- ⑤ 専門競技の全国大会のプログラムと、表彰台

でもらったマスコット。自己ベスト記録が出せた。

- ⑥ いつも使っている競技の道具。
- ⑦ 競技を行う場所。
- ⑧ 大学のトレーニング場
- ⑨ 監督のサイン入りの著書
- ⑩ 家のCD/MD/DVDラック・音楽はスポーツにひけをとらないくらい好き
- ⑪ あるロックバンドのCD/DVD全巻
- ⑫ 上記バンドのボーカルのテレビ出演時の写真——人生の迷いや、生きていていいのかな、というような思いを表現する歌詞である。
- ⑬ 高校卒業式・所属運動部の部員全員＋先生2人。自分をスカウトした先生と、もう一人の先生。
- ⑭ 高校時の出身県の練習会で、専門的な指導をしてくれた先生——大好きな先生と、競技で出来た親友。楽しかった日々。
- ⑮ 高校時の、旗をもってやる練習をしている自分。何を犠牲にしても競技をやっている日々。このときこれだけがんばっていなければ、今はない。
- ⑯ いつも飲んでいるサプリメント。
- ⑰ 大学での練習場所。
- ⑱ 実家の犬。
- ⑲ 乗っている自転車。大学生になってからの活動の足。必需品。頭を真っ白にしたいとき、運動部の友達とこれで遠出して、心洗われた。

考 察

写真の内容・順序とインタビュー内容からみるアイデンティティ

Aさんの撮影と語りの内容は、両親の写真の後は現在の住まい、大学運動部での仲間や日々の活動状況や競技成績、大学運動部の監督、現在の私生活(音楽の趣味)と続いて、高校時代の運動部の活動状況や競技成績、仲間や先生方が続く。そして再び現在の写真に戻っている。19枚中、「両親」「自室」「音楽(3枚)」「実家の犬」(計6枚)以外はすべて競技に関係した写真である。Aさんの競技に関する写真の特徴としては、過去(高校時)・現在(大学時)を通じて、「自分が練習している姿、練習する場

所、使用する道具」に関する写真が多いことが挙げられる。「オリンピックを見ていて、くやしくて泣いてしまうことも(自分も出たいので)」と語るAさんは、頑張らない部員に対しては「自分がここまで競技のためにやっているのに、なんでそこまでやらないの、と思う」が、「その人の人生だから」あえておせっかいはしないとのことである。競技に打ち込む中で生じる心の迷いも、好きな音楽の助けを借りて基本的に自己の中で解決を図るようである。

写真投影法によって明らかになったアイデンティティの各要素

写真投影法によって明らかになったAさんの内的世界は、いわば「自分と競技の1対1の真剣勝負の世界」で、そこに入り込めるものは何もない。監督によれば、フォーム自体も独自の世界を築いており、人が真似してできるものではないという。競技と日常生活の関わりについては、Aさんは日本のトップを目指す立場として、競技にすべての力を注ぎ、私生活が多少犠牲になっても競技に専心する決意でいる。写真投影法によって描出されたアイデンティティの内容は、Marcia (1966)³のいう自己投入という要素を明確に表現しているといえよう。またErikson (1959)¹の4分類に即して考察すると、高校時、大学時の写真を通じて、1つの競技に打ち込んできた自分を確認する撮影内容となっており、「自己の斉一性・連続性」がよく表現されている。両親の写真も、幼い頃から現在に至るまでの自分の核となるものとして、このカテゴリーに分類される内容といえる。また、当該の競技に専心することで、「対自的同一性」を確立し、競技成績が表彰を受けたりすることで「対他的同一性」および「心理社会的同一性」を確立していった様が明確に表れている。

「持ち寄り写真投影法」が持つ可能性

1. 写真が語りの糸口になる。「漠然と聞かれても答えようがないもの」に関して、写真を媒介としてインタビューーとの共有ができるため、インタビューを短時間で、密度の濃いものにするのに非常に有効と考えられる。しかも、研究者側

があらかじめ用意した設問ではなく、本人の選んだ「糸口」であり、個々のインフォーマントの個別性を十分に尊重する方法といえる。1人につき約60分間を2回という短時間のインタビューであったが、選手の過去・現在・未来および競技観、人生観、人間関係観を含む内的世界を詳細に捉えることが出来た。

2. 写真という視覚的情報という「物的証拠」を元にした語りを聴くという形式は、インタビューアーの主観的解釈を減じ、内容の客観性を高める。インタビューアーとインフォーマントのイメージしているものが実はずれていた、ということが起こりにくいと考えられる。
3. 「投影法」であり、アイデンティティの構成について本人が自覚していない部分まで視覚的に捉えられる。
4. 手持ちの写真とそれに関する語りから、過去の出来事について、当該時点でどう思ったかを鮮やかに想起しやすく、同時にその出来事に対して現在抱いているイメージとその時点での客観的現実の乖離の溝が埋められる可能性がある。つまり、その出来事が自分に与えた影響を過大(過小)評価していた、などの気づきにつながる可能性がある。

研究2

目 的

研究2では、1人の人物が3つの撮影テーマによる写真撮影を行い、その内容を比較する。写真投影法における撮影テーマの設定が撮影内容に及ぼす影響を詳細に検討する。

方 法

以下のテーマ1～3に関して、各々2～4週間の間に撮影した。デジタルカメラを使用し、各テーマに関して20枚程度の写真を撮影した。なお、過去に撮影した手持ちの写真を加えてもよいこととした。

次に、撮影した写真に関するインタビューを行った。本研究では著者がインタビューアー、卒業研究学

生が写真の撮影者およびインフォーマットとなった。

1. 撮影した写真と手持ちの写真を合わせた中から、類似したものをグループにまとめた上で、10枚(10グループ)を選び、自分にとっての重要度に応じて順位をつけた。
2. 重要度1位の写真(グループ)から順に、各写真(グループ)10分以内で、その写真にまつわるエピソードや、その写真がどのように自分をあらわしているのかを、インタビューアーに説明した。最後に、撮影のテーマそのものに対して、実際に写真を撮影してみても感想を自由に述べた。インタビューはビデオ録画を行い、それぞれの写真をビデオ映像に残すようにし、写真はインタビュー終了後に本人が持ち帰った(写真は本人にとって重要な思い出の品であることと、プライバシー保護の観点から)。
3. 撮影者自身がテープ起こしをし、プロトコルを記録した。本人が行ったのは、卒業研究という学習の一環であることと、プライバシー保護の観点からである。

撮影者のプロフィール:撮影者は短期大学卒業後、社会人を数年したのち、本学に3年次編入をしていた学生である。自分でアルバイトをして学費と生活費を負担しながら、将来の職業(教職)に向かって努力していた。

結 果

撮影テーマ1:「私の大切なもの」

重要度1位:家族でのクリスマスパーティの写真。サンタクロースの帽子等を身につけている父と母の笑顔の写真。“温かい家族”。家族や親戚が集まったのバーベキューや行事などについて語っている。

重要度2位:出身地X県の友人たちの写真。地元で一緒にダンスの活動をしていた友人グループの写真、高校時代の友人と温泉旅行に行った写真、友人の結婚式の時の写真など。写真が象徴するのは、“X県での友人関係”が今の自分(東京で学生をしている)の心の支えであるということである。

重要度3位:大切にしているものの写真。目覚まし

時計、千円札、自分、X県の家族や友人たちと撮った写真9枚をフレームに入れてあるもの、X県時代の友人からもらったメッセージと写真をボードに貼って玄関に貼ってあるもの、編入学する際に友人たちが書いてくれた送別の色紙、X県時代に勤めていた会社が送別のため作ってくれた、会社で撮った写真を使った特製カレンダー、X県の友人がくれたマグカップ、X県の友人が作ってくれたメッセージ入りのDVD、高校時代の友人がくれた、自分の名前を入れたオーダーメイドのブレスレット、現在使っている手帳、携帯電話、メイク道具が入ったバッグ、タバコ、部屋にあるテレビの写真。

目覚まし時計は、大学生活とアルバイトで非常に忙しい中で試験勉強や課題をやる生活が大変であることを表現している。“時間のなさ”は、毎日の生活面と、将来の職業を決めるにあたっての時間のなさの両面である。“いつまでもダラダラやっていたらあつという間に30歳になっちゃうんで”という。

千円札は、自分で学費を払って生活をしているのでお金は本当に大事とのことである。友人と2人で写っている写真は、働いたり勉強したりするのはすべて自分であるという意味である。また、今よりも少し痩せているそのイメージが好き。

自分で作った写真のコレクション。X県の友人たちと撮った写真や、家族・親類と一緒にの写真が額に納めてある。心の支えになっている写真を額に入れて玄関に飾っているという。送別の色紙、カレンダー、マグカップ、DVD、ブレスレットは、すべて「自分を支えてくれる人たち」を象徴する品々である。

手帳、携帯電話、メイク道具、タバコ、テレビは、すべて現在の日常生活を象徴するものである。手帳や携帯は、なくしたらたちまち支障を来すものであり、メイク道具は最近メイクをしなくなってしまった自分を表している。タバコとテレビは、ストレス解消や休息の手段であるという。

このテーマに関しては、写真に重要度の順位をつけるのが難しく、1つの重要度順位の中にたくさんの写真が分類されることとなり、結果的に重要度の順位数が他のテーマよりも少なくなった。

撮影テーマ2:「あなたはどんな人ですか」

重要度1位:X県の実家の玄関前で撮影した自分の後姿の写真。実家と自分の姿を一緒にフレームに入れて、「この家の子です」と表したかった。後姿なのは、顔の入った写真は気恥ずかしかったとのこと、頭をかいているポーズをとっている。

重要度2位:X県の田んぼの間の一本道を前にした、後姿の写真。道を人生にたとえて、その途上にあるという気持ちを表している。本当はもっと曲がりくねった道のほうが、人生の紆余曲折を表せる気がしたという。遠い道の先を見つめて立ち尽くしているような写真である。

重要度3位:X県の親友の結婚式の二次会で、面白い顔を作っている写真。こんな顔をすることもある、私にはこんな側面もある、ということを表したかったという。社会人入学をして、アルバイトをして学費を稼いで、若い同級生からはしっかり者だと見られていると思うし、年上の人にはそういうイメージを抱かれると思うが、自分にはおちゃらけた側面もある、これが素顔であるという思いがある。

重要度4位:勉強セット。学校で使う教科書やノートなどを立てたスペースを撮影した写真。および大学の学生証の写真。今の自分の仕事は学生である。

重要度5位:アルバイト先のファミリーレストランの制服を着た写真。首から下だけを写している。「自分はこういう人です」と表す意味で、名札を手で持っている。かなり長時間ここで働き、常連客から見れば「この店の人」という印象だろうということ。自己紹介をするとしたらここという側面は重要である、とのこと。「あなたはどんな人ですか」と聞かれて、手持ちの写真ではなく新たに撮るにあたって、顔も写った写真を取るのには照れくさいという。

重要度6位:別のアルバイト先であるファーストフード店の制服を着た写真。他の人に撮ってもらうチャンスがなかったので、鏡越しに自分で撮影した。学校よりも労働をしている時間のほうが長いと思うので、「この店でも働いています」というのは、自己紹介の中ではやはり重要だという。

重要度7位:道路に写った自分の影を自分で撮った写真。「あなたはどんな人ですか」というテーマで

写真を撮る際には、他の人にシャッターを押してもらって自分が写るほうがよいと思う、とのこと。当初はもっと外の風景などを使って自分のことを表現できるのではないかと思っていたが、実際に撮影するとなると難しかったので、自分自身を被写体とすることが多くなったという。

重要度8位：香水とヒールのある靴（サンダル）の写真。普段は体育大生としてジャージなど楽な格好をしているので、「私もたまにはお洒落もするよ、そんな一面もあるよ」という気持ちを表している。

重要度9位：甥っ子や姪っ子の写真。「私も、子どもと遊ぶこともありますよ。こんな自分もあります」。

重要度10位：昼ドラ（平日の昼間に放映している、主婦向けのドラマ）の画面が写った写真。夜はアルバイトで忙しいので、授業がない時の昼間の時間帯は、ゆっくりできるとのこと。

撮影テーマ3：「あなたの今の気持ち」

重要度1位：道で見つけた大木の写真。「色々な意味で大きくなりたい」と思って撮影したとのこと。大きくというのは、何でも許せる人、心の広い人、包容力という意味だという。

重要度2位：布団の写真。寝たい、疲れている、という気持ち。3年時より授業が減り、その分アルバイトが増えて、あまりにも眠い。一日中ダラダラ寝て、食べたいときに食べ、寝たいときに寝るという生活をしてみたい。

重要度3位：教員採用試験の願書など一式の写真。

合格したいな、合格しないけど、というような気持ち。勉強がなかなか進まないが、今すぐではなくてもいずれ合格したい、との思いがある。

重要度4位：背の高い木の写真。先述の木とは異なる木で、スマートな木である。無駄なものを省いて、シンプルに生きたいという。あれこれ思い悩まず、惑わされず、テキパキと生きたい。今の自分には余分な部分があって、自分に甘えていたりする部分があるので、それを切り捨てて、自分を律して、いろんな方向に気持ちが向かないようにしたい。これから年をとるごとにそうなっていきたいとのこと。

重要度5位：様々なお店のクーポン券が載った小冊子の写真と、セールのポスターが貼ってある洋服店の写真。ネイルアートやマッサージのお店のクーポンは、癒されたいという気持ちを表す。「女の娯楽」の部分を少し持ちたいとのこと。ショッピングもしたいな、という気持ち。今は時間の余裕もお金の余裕もないので、早く「休みの日にはお店に出かけて、疲れたらマッサージに行って、という余裕のある生活ができるようになりたい」とのこと。

重要度6位：X県の家族や友人たちを写した写真をたくさん集めたもの。X県にいる家族、友人、姪っ子などが写った写真を集めた。「早くX県に帰って遊びたいな」という気持ち。

重要度7位：ボーイフレンドが東京に来る予定が書かれた手帳のページ。早く来ないかなという気持ち。

重要度8位：白のズボンの写真。スーツの写真を撮りたかったが、東京のアパートには置いてなかったので、スーツのパンツに見えるズボンの写真を撮った。スーツは社会人の象徴という意味で、早く社会人になりたい気持ちを表したという。

重要度9位：卒業式、と書いてあるページを写した手帳のページの写真。毎日の生活が大変だし、早くX県に帰りたい。X県に帰って自分でお金を稼いで、普通の生活がしたいという思いが強い。

重要度10位：「体重計の写真。やせたいという思い。片足を乗せて調節して、自分の理想体重が表示されるようにして撮影した写真。

重要度11位：新幹線の切符を買ったときに入れてくれる袋の写真。X県に帰りたいという思いが強く、「もう、これ（この袋）大好き」とのこと。

重要度12位：「大学周辺にある民家（一軒家）の写真。一軒家は家族の象徴、とのこと。自分も将来家がほしい、普通に結婚してマイホームとかを建てて暮らしたい、との思いがある。こういう生き方もあるかな、という。子連れのママさんの写真も撮りたかったが、怪しまれるし無断では撮れなかった。将来の結婚などに憧れがある。

重要度13位：X県の山の写真。山は遠いような近いような感じ、だという。

考 察

3つの撮影テーマによる撮影内容の比較—それぞれのテーマによる撮影から発見できたこと

1. 撮影テーマ1「私の大切なもの」——「対自的自己」と「自己の斉一性・連続性」

撮影者はこのテーマが最も写真を撮影しやすいと考えていた。自分の大切な人や物という、形ある対象をフレームに収める作業をするのだろうと予想し、実際にそのような撮影内容となった。自分自身の姿は、友人の写真に自分も一緒に写っているという形で登場するのみであった。写真の重要度については、順番をつけるのが難しかったという。時間とお金とどちらが大切か、といわれても比較の次元が異なるし、自分の将来にとってどちらも大切なものだからである。

はじめは「大切なもの」といわれてもピンとこなかったというが、撮影を進めていくうちに、家族や親戚、友人など、自分を支えてくれる人たちの大切さを改めて実感したという。そして、それらの人々に支えられて今日の自分があること、毎日の勉強とアルバイトに疲れて見失いがちになっていたが自分には大きな夢があることを再認識できたという。

「私の大切なもの」という撮影テーマによって、ロジャース派カウンセリングでいう“Here and Now”と、その積み重ねが将来につながっていく感覚を持つことができたようである。時計やお札という撮影内容も、自己実現に向けての歩みの中で重要な役割を果たすものという意味づけを与えられたのである。このテーマは「対自的自己」および「自己の斉一性・連続性」を表現し、再確認させる効果をもたらすようである。

2. 撮影テーマ2「あなたはどんな人ですか」——「対自的自己」と「対他的自己」

撮影者は当初、他者から見た「この人はこんな人だ」と一目でわかる写真を撮ると考えており、実際にそのようになった。自分が写った写真が多くなるであろうとの予測は正しかったが、自分の姿を写真に入れることに対する照れは、予想以上にあったという。しかしそれだけでなく、他者からのイメージとは異なる自分を表現したいという写真も多くを占めた。社会人入学で他の学生よりも年上であることもあり、「ここ(大

学)での自分ではない姿」について、日ごろから意識している部分があったという。

写真の重要度によって順番をつけるのはなかなか難しかったというが、「私はこの家で生まれ、こんな道を歩み、こんな一面もある」という流れで自分を紹介する順番になっている。撮影の技術的な部分としては、写真に自分が写るためには、他人に撮ってもらうのが一番よいが、そうでなければ工夫して自分で自分の姿を入れて撮りたいとのことであった。

この撮影テーマからは、普段から薄々思っていた、現在の、とりわけ他者からみた客観的な自分の姿(公的自己)と、自分自身が思う本当の自分の姿(私的自己)の乖離が明確になった。前者はまさに「対他的自己」、後者は「対自的自己」を表している。

3. 撮影テーマ3「あなたの今の気持ち」——現在から未来への「自己の斉一性・連続性」

撮影前の予測としては、自分のその時々のお気持ちを表す風景は容易に見つかると思っており、小道具を使つての撮影もできると思っていた。しかし実際には、自分の気持ちにピッタリと合う風景を探すことに苦戦したり、もっと時間があればもっとよい写真が撮れるのでは、という悩みが生じた。撮影内容は、今の瞬間およびここ数日の短期的な状態(眠い、疲れたなど)を表す写真と、人生の中で現在の自分が置かれた立場(将来の方向性を決めなければならないが、その途上にあつて悩みもあるなど)を表す写真が多かった。この撮影テーマの特徴として、「願望」や「目標」を表す写真が多くなった。もっと大きな人物になりたい、自分を律したいというものから、日々の生活での癒されたい、眠りたいといったものまで、様々なレベルでの願望が表現されていた。このテーマは、現在から将来に向かっての「自己の斉一性・連続性」を表しているといえる。

文章記述による20答法と写真投影法の比較

写真投影法と文章記述による20答法との比較を行うことにより、言語だけでなく視覚的手段によって自己を表現することの意義を考察する。本研究に関しては、特に撮影テーマ2「あなたはどんな人ですか」が、この20答法とほぼ同じ指示内容となるが、大石

(2003)¹⁰の10答法における回答は、本研究におけるテーマ1～3のすべてにわたる撮影内容を含むといえることがわかった。その意味で、本研究における3つのテーマによる写真投影法は、撮影者のアイデンティティを異なる側面から測定し分けることができるものであり、20答法よりも具体的に正確な結果が得られるといえる。

本研究では補足データとして、撮影者に併せて20答法も行っている。撮影者の感想としては、20答法では半分すなわち10個くらいを記述すると煮詰まってしまう、書くことがなくなり単に連想によって何かを書くという状態になったという。これでは、自分の姿がきちんと回答に表れるのか、やや疑問に思ったという。また写真を撮影するほうが、どんな写真を撮ろうかと考える時間が与えられていることもあり、その場で文章で自分について書かなければならない20答法よりも、自分について誤解なく表現できると感じたという。さらに、他者に自分を説明する際にも、写真があることでより誤解なく伝達できると考えたという。

撮影期間や枚数について

撮影期間については、本研究では各テーマに関して2～4週間で撮影を行ったが、構想を練る期間、練習期間を含めて、2ヶ月程度あったほうがよいと感じたという。期間が長くなれば、その間に被写体や撮影方法にも若干の変化が生じたかもしれないという。期間については、期間を区切ることによって特定の時点での自己のあり方を正確に把握するか、あるいは長期間を通じての変化自体も研究対象とするかによって、長短を設定することができよう。

撮影枚数については、多すぎると本当に表現したいことが埋没してしまうと感じ、また少なすぎると十分な表現ができないという観点から、10枚前後(8～12枚程度)がよいのではないかと感じたという。本研究ではデジタルカメラを用いて撮影を行ったが、枚数の設定においては使い捨てカメラ1本を念頭に置いて、1つのテーマについて20枚程度の写真を撮影、または手持ちの写真の中から持参した。そのため、何枚かの写真をまとめて1グループとして分類・解釈した部分があった。確かに、1テーマにつき10枚前

後でよいかと考えられた。

技法としての写真投影法の位置づけ

写真投影法は、専門のカウンセラーが何らかの主訴を持って来談したクライアントに対して行うカウンセリング技法ではない。写真投影法はあくまでインタビューであり、インタビュアーは話の聞き手という立場である。すなわち撮影者の自己発見的効果は、セルフ・カウンセリングとしての効果であるといえる。このように位置づける利点としては、専門のカウンセリングを受ける機会のない一般の人々が、自己理解のために広く手軽に用いる方法として、この手法が応用されてゆく方向性を導ける点である。今日では、携帯電話の写真撮影機能(いわゆる「写メール」など)や、安価で小型のデジタルカメラの普及により、主に若い世代で写真の撮影が極めて日常的な行為として行われるようになってきている。この写真の撮影という行為を、自己のアイデンティティの記述と理解に役立てることができれば有益である。

引用・参考文献

- 1) Erikson, E. H. 1959 小此木啓吾訳1973 自己同一性: アイデンティティとライフサイクル 誠信書房.
- 2) Kuhn, M. H. & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self attitudes. *American Sociologist Review*, 68-76.
- 3) Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 4) 向山泰代 2005 自叙写真に表現された自己概念の一貫性について 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, 14, 121-122.
- 5) 長瀬安弘・浅野智子 2004 写真投影法による森林ボランティアと大学生の森林における空間認知に関する研究 ランドスケープ研究, 67, 615-618.
- 6) 中村彰吾・小林昌毅・高橋邦夫・萩原良巳 2001 写真投影法による都市域河川の水辺

- デザイン情報抽出 ランドスケープ研究, 64, 821-824.
- 7) なかにしあつこ 2004 「本当の自分」を見つけるフォトセラピー 出版文化社.
 - 8) 野田正彰 1988 漂白される子どもたち——その眼に映った都市へ 情報センター出版局.
 - 9) 野村 訓 2004 レンズの向こうに自分が見える 岩波書店.
 - 10) 大石千歳 2003 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究 風間書房.
 - 11) 大石千歳 2005 私の大切なもの 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集, p.123-p.124.
 - 12) 岡本卓也・林 幸史・藤原武弘 2009 写真投影法による所属大学の社会的アイデンティティの測定 行動計量学, 36, 1-14.
 - 13) 志村ゆず・鈴木正典・伊波和恵・下垣光・下山久之・萩原裕子 2004 写真でみせる回想法——付・生活写真集 回想の泉 弘文堂.
 - 14) 鈴木正典 2009 思い出かたり——写真で回想してみませんか かもがわ出版.
 - 15) 谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成. 教育心理学研究, 49, 265-273.
 - 16) Ziller, R. C. 1990 Photographing the self. Newbury Park, CA, Sage.

脚 注

1. 研究1は大石 (2005)¹¹に基づいている。本稿の執筆にあたり、写真の撮影者であるAさんには再度研究成果の公開許可を得ている。本稿では、引用文献リストに掲載する際に発表題目の副題を省略することにより、プライバシー保護にさらに留意した。
2. 研究2は、著者の指導のもとに行われた東京女子体育大学卒業研究の内容に基づいている。写真の撮影者 (卒業研究の著者) には、卒業研究の内容を決定する段階から、研究成果を本学紀要で発表したい旨を説明し、了解を得ている。撮影者からは、大学生活と卒業

研究のよい記念となるので、実名の公表も構わないとの許可をもらっているが、紀要編集委員会による審査結果を踏まえて、撮影者の匿名性を確保しプライバシーを保護するために、当該卒業研究は引用文献リストから省略することとした。